



平和について考える（４）

～ヒロシマ 共に学ぼう～

８月６日に広島で行われた「７９回目 広島原爆の日」平和記念式典での子ども代表による、平和への誓いを紹介しましょう。

目を閉じて想像してください。

緑豊かで美しいまち。人々にぎわう商店街。まちにあふれるたくさんの笑顔。

７９年前の広島には、今と変わらない色鮮やかな日常がありました。

昭和２０年（１９４５年）８月６日 午前８時１５分。

「ドーン!」という鼓膜が破れるほどの大きな音。

立ち昇る黒みがかった朱色の雲。

人も草木も焼かれ、助けを求める声と絶望の涙で、まちは埋め尽くされました。

ある被爆者と言います。あのときの広島は「地獄」だったと。

原子爆弾は、色鮮やかな日常を奪い、広島を灰色の世界へと変えてしまったのです。

被爆者である私の曾祖母は、当時の様子を語ろうとはしませんでした。

言葉にすることさえつらく悲しい記憶は、７９年たった今でも多くの被爆者を苦しめ続けています。

今もなお、世界では戦争が続いています。

７９年前と同じように、生きたくても生きることができなかった人たち、明日を共に過ごすはずだった人を失った人たちが、この世界のどこかにいるのです。

本当にこのままでよいのでしょうか。

願うだけでは、平和はおとずれません。

色鮮やかな日常を守り、平和をつくっていくのは私たちです。

一人一人が相手の話をよく聞くこと。

「違い」を「良さ」と捉え、自分の考えを見直すこと。

仲間と協力し、一つのことを成し遂げること。

私たちにもできる平和への一歩です。

さあ、ヒロシマを共に学び、感じましょう。

平和資料館を見学し、被爆者の言葉に触れてください。

そして、家族や友達と平和の尊さや命の重みについて語り合いましょう。

世界を変える平和への一歩を今、踏み出します。

令和６年（２０２４年）８月６日

子ども代表

広島市立祇園小学校６年

加藤 晶

広島市立八幡東小学校６年

石丸優斗

願うだけでは平和は訪れない……。どうしたら平和な世の中がつかれるのかを普段から考えておくことが大切なのではないのでしょうか。

上記の「平和への誓い」を読んで、各家庭で平和について話し合ってみましょう。

青少年育成センター指導員 藤村